

巻頭言

世界史の文脈

岡洋樹（教授）



学生に歴史の講義をしていて、「先生のお話は面白いです」というコメントをいただいて困惑した。講義のテーマはモンゴル史である。もしその学生がモンゴルの歴史は面白いと感じてくれたのならよいのだが、もし面白かったのが歴史ではなくて、私の話だったのだとすると、気分は複雑である。研究者としては、歴史そのものに面白さを感じてほしい。しかしもし歴史のなかみに関わりなく、話しをする者の話術で歴史が違って聞こえるなら、歴史の面白さは、歴史そのものではなく、私に属していることになる。

当たり前だと言われるだろうが、私は歴史上の事象をそのまま述べているのではなく、事象に対する私の理解、解釈をとりまとめて話している。とすると極端に言えば事象そのものは素材に過ぎず、素材を使って作った私の料理が歴史なのだ。では私の理解や解釈は、「正しい」のだろうか。そもそも歴史事象を完全に「正確」に記述することは不可能である。なぜなら歴史研究者が日々格闘している史料とは、出来事そのものではなく、出来事に関する誰かの解釈を記述したものにほかならないからである。つまり私は、誰かの解釈に自分の解釈を加えているに過ぎない。だから歴史認識の「正しさ」とは、「正確さ」以上に、「正当さ」を意味している。では「正当さ」の有無はいったい何が決めるのか。それは私自身が属している時代と場

所を満たす意味である。だから同じ時代に生きていても、どこにいるかで語られる歴史の意味は異なる。いわゆる歴史認識問題の大方はこのあたりに淵源を持っている。

では特定の時代と場所を超越した認識は可能だろうか。近年、歴史学界では世界史をいかに叙述するのが盛んに議論されている。もし私が世界史を叙述しようとするれば、世界に跨がる該博な知識だけでなく、私の生きる場所を世界と定位することが必要となる。つまり世界史を叙述する「正当さ」は、自分が世界人であることにある。近代の歴史学は、歴史家を時代を超越した「神」の位置に置いた。これには無理がある。かつて人類の発展法則がかまびすしく論じられたが、結局発展というシェーマはヨーロッパの地方的な文化の産物だった。今回の「世界史」をめぐる議論は、どうやら「グローバル化」の時代が関わってそうである。「グローバルな世界」というトートロジックな言葉が表すのは、世界中の人々がネットワーク状に繋がる世界である。その歴史とは、中心や発展が想定されない交流史のようなものになるだろう。だが、歴史家がもはや「神」の位置に立てない以上、この「世界史」を語る「世界人」たる歴史家がいかなる文脈に身を置く存在なのか、やがて問われそうな気がする。

contents

- | | | |
|---------------|-----------------------|--------|
| 1 巻頭言 | 4 最近の研究会・シンポジウム、展示会ほか | 8 活動風景 |
| 2 今後日本がなすべきこと | 6 新任ごあいさつ | |
| 3 私の東北アジア研究 | 7 著書・論文紹介 | |



今後日本がなすべきこと

柳田賢二

モンゴル・中央アジア研究分野／
准教授、全学教育ロシア語担当教員



私は2017～2019年の8月に1週間ずつモスクワ郊外に滞在し、2014年のクリミア併合に対する経済制裁により年々悪化する庶民生活とそれに起因する排外感情を目の当たりにした。またバルト三国やジョージアでのロシア語系住民圧迫についても国内で他大学の研究者による報告を聞き、深夜のBS放送の紀行番組や旅番組でなされる言及に注目してきた。近い将来ロシアとNATOのいずれかの国との間に偶発的な衝突が起こることが強く懸念されたので、本NLでも、また外国語教育関係の全学委員会でも、機会があるごとに東欧について注意を呼びかけてきた。それでもこのウクライナ戦争は私にとって衝撃だった。その理由は、それが偶発的の事件ではなく、そこにロシア国民全体の甚だしい「劣化」が凝縮されていることが見て取れたからである。

ヒトラーが妄想していた「東方生存圏」においてロシア人ほかのソ連諸民族は文字通りの奴隷とされることになっていた。ロシア人にとって「ナチズム」は自らと絶対に相容れない思想であり、それに反対することは無条件で善である。他方、ウクライナ大統領ゼレンスキーはユダヤ人であり、ソ連時代から続く、主に大学生の出演者からなる全国規模の公開お笑い番組「KVN」出身のお笑い芸人であった。それゆえ、私のウズベク人の友人ですら彼をその学生時代から見知っている。その芸能活動がロシアのテレビで放送され、それをウズベキスタンで見っていたからである。旧ソ連のロシア語系ユダヤ人お笑い芸人が、ナチであるわけがない。

2014年のロシアによるクリミア併合の少し後のことだったが、米国がウクライナ東部で「親ロシア派」と戦っているウクライナ民族派の武装集団に武器援助をしようとしたところ、後者がヒトラーの肖像を持ち歩いていることを大統領のオバマ自身が知り、援助を中止したとの報道を日本で読んだ。その秋にタシケントを訪れた際に件のウズベク人にこのことを話すと、即座に、

「そういう連中はウクライナに限らない」と言って、ロシアのサイトを見せられた。確かに、そこには、いくつもの集団がヒトラーの肖像やハーケンクロイツを掲げ、ロシアの街でデモ行進をしている写真があった。ロシアにせよウクライナにせよ、排外的スローガンを掲げ、ナチスの象徴を掲げてデモをする者の正体とは、日本語で言えば単なる「ヤンキー」である。

私はゼレンスキー政権に全面的な共感を持ってない。しかし、彼らがナチであるというのは、ウクライナ侵攻の口実を作るために、プーチンがなしたでっち上げであることは断言できる。また、今後プーチンが何を言おうと、絶対に忘れてはならない事実がある。それは、侵攻開始時に、ロシア軍がいきなりキーウをミサイルで攻撃するとともに、その空挺部隊がキーウ近郊の空港を一時占拠したこと、同戦車隊が北のベラルーシ国境からまっすぐ南進してキーウを目指したことである。ウクライナ軍と国民の抵抗のあまりに強さに1ヶ月で断念したものの、プーチンの目的がキーウ占領とゼレンスキー政権転覆および傀儡政権樹立だったことは間違いなく、侵略戦争以外の何物でもない。

ロシア国民は、これだけあからさまな嘘が分からないほどに劣化してしまった。開戦直後にあちこちの都市で見られた反戦デモは規模の大小を問わず警察の暴力によって徹底的に踏み潰され、残ったのは戦争支持の声だけである。3月18日、「ナチズムなき世界のために」なるスローガンが大書されたモスクワのスタジアムでプーチンの「特別軍事作戦」を支持する数万人の集会があった。そこでプーチンの演説に熱狂する数多くの若い男女の顔は実に愚かしく、醜悪であった。

私はプーチンについて、その暴力性と残忍さと嘘つきさを知りつつも、バルト三国での「言語警察」によるロシア

語系住民への人権侵害や、ジョージアで2019年に起き、議会占拠にまで至った「ロシア人が議長席でロシア語で演説し、ソ連時代を想起させた」ことを理由とする理不尽な反露暴動（注：このロシア人は、ジョージア議会自体が招聘したロシアの下院議員である）のような、明らかに西側が背後にいる挑発に乗らないことだけは肯定的に評価してきた。しかし、プーチンはついに最悪の形で西側からの挑発に応じてしまった。

私はこの戦争を「専制主義（あるいは権威主義）対民主主義」の戦いとは考えない。しかし侵略者に得をさせることがあってはならない。プーチンがしてきたこととは、ウクライナ史の都合のよい部分だけを悪用した執拗なプロパガンダで自国民を洗脳して歴史と現実を混同した暴論をたたき込み、独立国を属国化するための軍事侵攻を命じたことである。そしてまた、この戦争を批判する者は外国人ジャーナリストであろうと容赦のない長期刑に処するという大統領令を出して戦争を継続させることである。

ロシアにはウクライナが被った全ての人的・物的損害に対し賠償をさせなければならない。ところが、そのためにはウクライナが戦争に勝たねばならず、勝つためにはウクライナ国民が長い戦争に耐え、我が国を含む西側が戦争終結まで同国を支援しなければならない。また、今後事態がいかなる経過をたどろうと、米国やドイツが参戦することだけは絶対にあってはならない。それは即ち第三次世界大戦の開戦だからである。もし今後、小型核兵器を使うなどという発言がいずれかから上がったなら、我が国が唯一の被爆国として全力で阻止しなければならない。この戦争はどうしたら終わるのか。開戦から半年の間いろいろと考えを巡らせてきたが、考えは同じところを彷徨するばかりである。

しかし、ただ一つ、はっきりと言えることがある。1941年の独ソ開戦時とは違い、今回の危機を、我が国はロシアとの間に中立条約すらない「非友好国」として迎えてしまった。今後日本がなすべきは、この戦争をアジアに飛び火させないためにあらゆる努力を尽くすことである。

やなぎだ・けんじ 1960年生まれ。神奈川県出身。1983年東京外国語大学ロシア語学科卒業、1989年東京大学大学院人文科学研究科博士課程（露語露文学専攻）単位満了退学。専門はロシア語学およびロシア語にかかわる言語接触の研究。

私の東北アジア研究

種子島における土器の出現と新石器化の地域特性

飯塚文枝

客員研究員

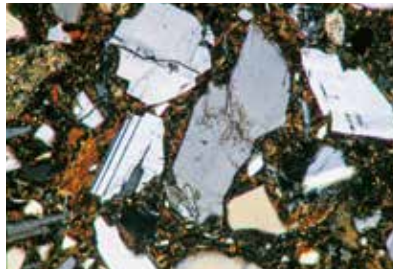


人類史の中で初めて土器が作られたのは最終氷期末（2-1万年前）の北東アジア地域である。これまでの研究から、最古の土器が確実に出現したのはアムール川流域と日本列島だと考えられている。これらの土器は狩猟採集民が作り始めた。この事実は、80年以上前にゴードン・チャイルドが提唱した、土器作り、農耕の始まりおよび完新世の始まりを結びつける新石器革命の仮説とは異なるものだ。私は過去8年ほど、北東アジア地域に焦点を当て、土器の出現理由を探る研究を行ってきた。具体的な研究テーマは、土器を中心とする新技術の採用と気候変動・生態系の変化との関係性、土器の製作過程の復元と製作者の使用意図の推定、生産と流通および定住度と移動度の変化・変異性の説明である。物質科学および地質学的手法を取り入れ、遺物と原材料の総合的な比較研究を遂行している。

土器の起源の問題を解決するにあたり、南九州は特筆すべき地域である。縄文時代草創期の遺物・遺構は薩摩火山灰（約12,800年前）の下位から検出されている。このように初期の土器が出土する地層の確実性の高い年代が得られる地域は極めて珍しい。南九州ではまた、火山岩、堆積岩、深成岩および様々なテフラの分布が認められ、



種子島における、産地同定分析のための土器原材料採集



種子島、三角山1遺跡から発掘された縄文時代草創期土器の偏光顕微鏡写真（XPL）

土器・石器の産地同定に非常に適している。このことから私は特に南九州を研究拠点としてきた。

私が主に日本学術振興会の助成金を使用し遂行してきたこれまでの研究成果は以下のように要約される。(1) 14,300年前頃までには海面上昇により九州本土と種子島・屋久島が島化し（e.g., 森脇他 2015）、その変化が縄文時代草創期への移行と対応する可能性があること。(2) 縄文時代草創期には、本土南九州よりも種子島の方が狩猟採集民の定住度が高かったと推測されること。(3) 土器は本土南九州でより早く作られ始めたものの、種子島の方が高い温度、または長時間焼かれ、そのことから製作者の定住度の高さが推測されること。より割れにくい土器はまた、長期間の使用に適していたこと。(4) 種子島の遺跡の土器は器厚も薄い傾向にあり、運搬にも適していたこと。(5) 種子島の遺跡では南九州本土または屋久島から運ばれたと推測される土器・石器が認められること。(6) 後期旧石器時代終末期の遊動型の狩猟採集と比較し、種子島では、遺物の量、重さおよびそれらの多様性において縄文時代草創期に大きな変化が認められること。これらの結果から、縄文時代草

創期の南九州、特に種子島では、従来の農耕の起源と関わる新石器時代の始まりの解釈とは異なる、定住度の高い狩猟採集民により最終氷期に土器の採用と新石器的生活が始められた可能性が推定される。

しかしながら、これらの推測は更なる検証が必要である。例えばこの地域では後期旧石器の終了時期、および縄文時代草創期の始まりの詳細な年代がわかっておらず、生態系の変化と遺物・遺構の変化の明確な対応が掴めていない。700年-1200年程度続いた（と考えられる）縄文時代草創期の生業や技術の変化も不明である。そのため、行動変化の理由や、狩猟採集民の意図、遺跡間の関係性の正確な解釈が難しい状況である。これらの問題を解決するため、私は今年の12月からアメリカ国立科学財団の助成を受けて、国際的・学際的なチームを組み、種子島で発掘調査を行う。詳細な年代を決定し、遺物分析、および古環境の再構築を行う予定である。土器を始めとする狩猟採集民による新技術の採用、その変化の時期と強度、生態系の変化との関係性について検証し、地域の詳細な調査研究から新石器化の概念の評価を行いたい。



電子線マイクロアナライザ（EPMA）を使用した鉱物・火山ガラスの化学的産地同定

講演会

東北大学東北アジア研究センター・伊達市噴火湾文化研究所 第11回学術交流連携講演会
日本の世界遺産：北の縄文文化と南の島の生態系

後藤章夫

(地球化学研究分野/助教)

開催日 2022年3月18日公開

会場 オンライン開催

web http://www.cneas.tohoku.ac.jp/news/2021/renkei_11th.html

本

センターと北海道の伊達市噴火湾文化研究所の学術交流協定の一環として、表記の講演会がオンデマンド配信で公開された。コロナ禍の収束が見えない中、前年度に続いてのオンライン開催である。今年度は双方の研究者が登録に深く関わった、日本の北と南にある世界遺産をテーマとした。本センターからは千葉聡教授が、『世界遺産 小笠原諸島自然遺産の現状と課題』と題して、伊達市噴火湾文化研究所からは永谷幸人学芸員が、『世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」と伊達市北黄金貝塚』と題して、それぞれ講演を行った。

千葉教授の講演では、小笠原はそこに生息する陸産貝類と維管束植物の並外れた高いレベルの固有性が評価されたことが説明され、陸産貝類の進化系統の具体例が示された。小笠原諸島では、樹上、地上など、生息場所の違いに応じて、一つの系統からの多様化が様々な時代と場所で起こったという。このような

進化は非常に珍しく、世界遺産登録の大きなポイントの一つになったことや、約120種の在来種の陸産貝類が生息し、そのうち90%以上がここにしかない固有種であることが紹介された。小笠原では住民生活と生態系保全の両立を目指したのも特筆すべき点で、世界遺産登録後、自然保護が進められる中、観光客が増え、さらには人口も増加に転じたというのは興味深い。一方で、外来生物の脅威といった問題点も指摘されていた。

永谷学芸員からは、北海道・北東北の縄文遺跡群が、非農耕型の狩猟採集を基盤としながら、環境に適応して定住した稀有な例で、1万年以上も継続し、豊かな精神文化が育まれたことを示す物証として評価されたことが紹介された。伊達市北黄金貝塚で見られた、貝塚がゴミ捨て場ではなくすべての生き物の「墓」として扱われていたことは、その精神性を示す一例である。日本の縄文遺跡で北海道・北東北だけが世界遺産になったのは、

1万年以上に渡る遺跡が揃うのに加え、良好な保存状態の資産と保護体制の充実があるからだという。一方で、これらはすべての縄文を代表するわけではなく、それぞれの地域に根ざした縄文文化があり、いずれもが貴重で個性的で魅力的な文化遺産であるとの言葉で、永谷学芸員の講演は結ばれた。

講演会のページは現在も公開中で、昨年度のオンライン講演会のほか、対面実施された過去の講演会情報も掲載されている。それらも併せてご覧いただきたい。



連携講演会公開ページ

特別講演会

Confrontation and Cooperation: Soviet-Japanese Relations in Northeast Asia, 1922-1941



高倉浩樹

(ロシア・シベリア研究分野/教授)

開催日 2022年5月13日

会場 東北アジア研究センター・オンライン

2

2022年5月13日に、客員准教授ミノフ・シェルゾッド先生の特別講演会を、オンライン併用で開催した。発表題目は「対立と協力：東北アジアにおける日ソ関係 (Confrontation and Cooperation: Soviet-Japanese Relations in Northeast Asia, 1922-1941)」で、コメンテーターに國學院大学の神長英輔先生(ロシア史)を迎えた。

戦間期の日露はともに欧米秩序への挑戦者という点で共通しており、その過程で両国には対

立だけでなく協力があり、それらの歴史的意義を分析するものだった。当該分野で日本を代表する研究者である富田武先生(成蹊大学名誉教授)も参加され、刺激的な議論が行われた。

この講演会は人間文化研究機構グローバル地域研究事業東ユーラシア研究プロジェクト及び「昭和のロシア」研究会の共催で実施された。

なお、本ニューズレターの「新任ごあいさつ」にミノフ先生の自己紹介が掲載されているので、そちらもご覧いただきたい。



講演会のポスター

報告会

東北アジア研究センター研究成果報告会 2021



岡洋樹

(モンゴル・中央アジア研究分野/教授)

開催日 2022年6月24日

会場 東北大学川内北キャンパス・マルチメディア教育研究棟2階206大講義室

本 センターでは、毎年研究成果報告会を開催し、センターのスタッフの研究動向や成果を議論してきた。ここ2年間はコロナ・ウイルス流行のため、対面式での開催は見送られ、発表資料の共有にとどめてきた。今年度は3年ぶりに対面式の開催となった。コロナ禍を受けて、本センターでは研究活動の活性化のために、共同研究プロジェクトへの資金投入を拡大し、とくに若手研究者による共同研究の推進に力を入れてきた。今年の報告会では、昨年度実施された18件の共同研究の成果が報告された。地質・火山・生態といった自然環境に関する研究や、レーダ技術を用いた遺跡探査や防災利用に関する工学系の研究、モンゴルやロシア・ムス

リムの社会・歴史研究、現代東北アジアの経済や社会移動、東日本大震災後の地域社会の人類学的研究、さらには文理融合的性格の濃厚な東北アジア・東アジアの文化的適応や交流に関する考古学の研究、考古資料のデジタルアーカイブ構築に関する研究など、多彩で意欲的な研究の成果が報告された。注目されるのは、東北アジアにおける人間の環境への適応という課題が、震災・人類史・防災といった観点から共有され、一つの方向性を示しているように見えることである。また中国や日本ばかりでなく、モンゴル遊牧民やロシア・ムスリムの基層社会に関わる歴史的・現在の研究の成果が得られたことも喜ばしい。さらにデジタル・アーカイブを意識したプロジェクトが進展し

つつある点も注目すべきだろう。対面式の報告会ではあったが、一件はオンラインでエジプトからの参加だった。



報告会会場の様子

特別講演会

北極とアジアの水産貿易—アイスランドと日本の事例



高倉浩樹

(ロシア・シベリア研究分野/教授)

開催日 2022年7月1日

会場 東北アジア研究センター内（オンライン併用）

一 橋大学客員准教授（アイスランド大学所属）のクリスティン・イングバルスドットイル氏を東北大学に招へいし、「Arctic-Asian fisheries trade: The Cases of Iceland and Japan」として一般に向けた講演会を行った。同氏は、一橋大学で博士号を取得された日本学研究者である。彼女の受入教員である一橋大学の赤嶺淳教授との協力のもとで今回の講演会を実施した。

アイスランドと日本の関係、特に漁業の技術移転に関わる交流の歴史は日本ではほとんど知られていない。戦後にデンマークから独立を果たしたアイスランドと日本の関係は、高度成長期に水産

物の貿易を通じて深まっていったこと、とくに日本の水産物市場の動向がアイスランドの漁業に質的な影響をあたえた意義について詳らかになる興味深いものだった。現在、日本を含む東アジア諸国は、アイスランドやノルウェーからかなり多くの水産物を輸入するようになっている。近所にあるスーパーでも北欧産の海産物は身近である。その歴史的背景に光が当てられるとともに、北極域の水産業と東アジアの関係という新しい研究課題が見えてくることになった。

この講演会は東北大学日本学国際共同大学院及び北極域研究加速事業（ArCSII）社会文化課題の共催のもとに

実施された。日本学への新しい視座を提供し、また北極漁業についての知見を提供する興味深いイベントであった。



特別講演会のポスター

#1



久保山和佳

ヒトと地球の相互作用の変遷に関する研究ユニット／学術研究員

くぼやま・わか ▶ 考古学者。サウサンプトン大学人文学科博士課程終了（2022年）。博士（Ph.D.）。2022年5月より東北アジア研究センター学術研究員。

石製装身具の製作技術から先史時代をみる

私は先史コスタリカの考古学を専門とし、墓の副葬品として出土する石斧型ペンダント（500BC-AD900）を対象に、製作技術の拡散について研究しています。石斧型ペンダントは、ヒスイや蛇紋岩、石英などの岩石から作られた磨製石斧に、ヒトやトリ、ネコ科動物などのモチーフが彫刻された美しい装身具です。当時の主要利器であった石斧は、限られた地域で採取された希少な岩石を長時間研磨・加工して製作されます。それを再加工して象徴的・機能的な重要性を持たせたこれらのペンダントは、労働投下量が極めて高い特別な装身具であったと考えられます。東北アジア研究センターでは、1000年以上の長期間に渡って継続して利用された石斧型ペンダントの技術的發展過程と、その背後にある工人の世代間・地域間交流の解明に取り組みます。

東アジア史への新しいアプローチをめざして

2022年4月から7月にかけて東北大学東北アジア研究センターに客員准教授として滞在しました。フェローシップに応募したのは新型コロナウイルスが世界にまん延する直前の2019年12月で、戦間期（1920～1930年代）の日ソ関係・対立を中心に、日本人社会主義者・共産主義者の歴史を研究したいという思いからでした。仙台に来るまで2年以上待ちましたが、本センターで研究できたのは貴重な機会でした。

2011年から2021年にかけてシベリア抑留について研究してきた私は、学際的な組織である東北アジア研究センターに所属することで、多くを学べました。本センターで自分の研究を紹介する機会もいただき、5月13日に「対立と協力：東北アジアにおける日ソ関係」のテーマで発表させていただきました。日本にいる間に東北大学図書館や国立国会図書館、大原社会問題研究所及び国立公文書館で資料調査もできました。

最も重要だったのは、三ヶ月の滞在中に実施した研究交流、発表、資料調査を通じて、日本の研究者コミュニティと2年ぶりに交流関係を再構築できたことです。世界がコロナ禍で分断される中、来日して貴重な研究機会を持てたのは非常に幸いなことでした。これからの自分の研究に計り知れない影響を与える、得難い経験となりました。

#2



MUMINOV Sherzod

学術交流分野・客員准教授

ムミノフ・シェルゾド ▶ 2022年4～7月。イギリス、イースト・アングリア大学准教授。専門は日本現代史・東アジア現代史。日本語とロシア語の史料を駆使した歴史分析を行っている。

#3



Jennifer CLARKE

学術交流分野・客員准教授

クラーク・ジェニファー ▶ 2022年6～7月。2013年アバディーン大学 博士号（社会人類学）。2021年セント・ルーカス芸術デザイン学校芸術研究上級修士号。イギリス ロバート・ゴードン大学准教授。

人類学とアートの学際的研究をしています

東北アジア研究センターに在任中、膨大な人類学的フィールドワークと芸術的リサーチを行いました。インタビューや、ギャラリーやアーティストのスタジオを訪れ、主に東北地方、さらに西日本のアーティストやキュレーターと関係を築きました。

この人類学的・芸術的プロジェクトは、「おもてなし」という概念が、ジェンダー政治や芸術との関連において、どう作用するかを探ることから始まりました。このプロジェクトは、「おもてなし」がどのような形で女性の仕事と生活に関連するかを探ることに重点を置いています。具体的には、社会的な問題に取り組む現代アートやキュレーション・プロジェクトに焦点を当てます。

センター滞在中に推進した研究はまた、スコットランド北東部で最近進めているユニークな比較研究の発展にも貢献すると期待されます。来年、ギャラリー・ターンアラウンドとの展覧会で仙台に戻る予定で、その際のセンター再訪を楽しみにしています。



清代モンゴル境界考： 遊牧民社会の統治手法と移動

堀内香里 著

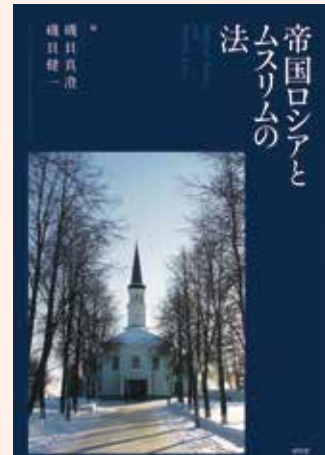
明石書店 2022年2月刊

text: 堀内香里

本書は、清代モンゴルの盟旗の境界について書かれた歴史研究書である。この境界は従来、清朝政府がモンゴル人を各旗に閉じ込めることで、或いは牧地を寸断して各旗に与えることで、その機動力の弱体化を図って設けたとされてきた。本書では視座を新たにし、モンゴル社会にとっての境界の意味を重点的に考察した。

膨大なモンゴル語、満洲語の一次史料を調査した結果、境界は清朝政府が一方的に設置したのではなく、モンゴル独自の統治手法に不可欠であったことが判明した。その統治手法とは、モンゴル人を組織ごとに集住させて管理することで、賦課の供出、生活保護、犯罪の予防、行政伝達といった統治の根幹となる行為を円滑にさせるものである。したがって、彼らは常に集団で暮らさなければならなかったのであり、そうした集団と集団の間には自ずと境界ができた。このことは、当該社会における「境界」が可動であったことを意味する。彼らが遊牧移動をすれば境界も動くからである。清代モンゴルでは、このような統治にとって重要な「境界」を可視化すべく、旗という集団間の境に木や石の目印を大地に建てオボーと呼び、同時にそれを紙面上に描いて地図とした。これが清代モンゴルの境界である。

なお、本書は日本学術振興会の研究成果公開促進費を受けて刊行された。



帝国ロシアとムスリムの法

磯貝真澄、磯貝健一 編

昭和堂 2022年2月刊

text: 磯貝真澄

ロシアを多民族の「帝国」として分析しようとするロシア帝国史研究は、近頃マスメディアでも話題のユーラシア主義の流れに位置付けられる西・中欧のロシア史研究者によって始められ、そこにロシアの研究者も参入して約20年になる。ロシア帝国が民族ではなく宗教や宗派に基づく集団を統治する機構を備えていたことが指摘されてからも、15年以上が経つ。主に人文学系と政治学系のロシア史研究者が担ってきたこのテーマに対し、本書は人文系東洋史・東洋学、法律学、人類学の共同研究の成果を示す。19世紀から20世紀初頭のロシア帝国による中央ユーラシアのムスリム統治と、そのもとでのムスリム社会を、「legal pluralism」(法多元主義、多元的法体制)をキーワードに描出しようとする学術論集である。

本書の第1部はロシア帝国がムスリム集住諸地域を対象に構築した法制度——ロシア法とイスラーム法の複合——を扱う。全体の概観(第1章)ののち、ヴォルガ・ウラル地域(第2章)、南東コーカサス(第3章)、中央アジア南部のオアシス地域(第4、5章)につき、細部を解明・議論する。第2部は、ロシア帝国法の「多元性」の観点からの解析(第6章)、中華民国期南京の不動産登記にみる「多元性」(第7章)や、現代ウズベキスタンの家族関係における「法」(第8章)の分析であり、第1部の議論の視野を広げる。

歴史資料保全活動と研究の広がり

竹原万雄

(上廣歴史資料学研究部門/
助教)



4月に上廣歴史資料学研究部門に着任し、歴史資料保全活動のひとつとして「石巻市住吉勝又家資料」(以下、「勝又家資料」)の整理に取り組んでいる。もっとも、この整理は本年度から始めたわけではなく、2012年から継続している。

勝又家は江戸期から医師を生業とし、明治期以降も医院を開業する旧家として知られていた。しかし、2011年の東日本大震災で津波の被害にあってしまう。それから約10ヶ月後の2012年1月、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワークによって資料レスキューが行われた。

その後、医療や公衆衛生史を研究テーマとする筆者にお話をいただき、同資料ネット、東北大学災害科学国際研究所と共同で資料整理をさせていただくことになった。作業は、被災した資料のクリーニングや簡易修復、デジタルカメラでの撮影、目録作成である。当時所属していた東北芸術工科大学の

授業や、学生有志と組織した「古文書調査会」で活動を続け、10年目にしてようやく完了の目途が付き、「勝又家資料」の全体が見えてきた。

資料の時代は、明治から昭和にかけての近代が多くを占める。もちろん医療や衛生に関する資料も残されている。医学関係の書籍は江戸期のものからみられ、『患者処方録』や『葉価診療取入簿』からは明治期の医療活動がうかがえる。

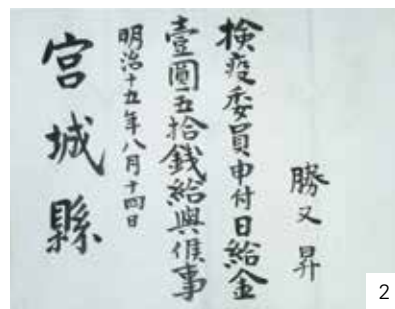
感染症が流行した際には、県や町村が主体となる防疫活動に従事した。明治期は致命率が60%以上にもおよぶコレラがしばしば流行した。とくに1882年(明治15)は、宮城県で4,000人近くの患者と2,300人以上の死者が出た。「勝又家資料」には、この年に県の検疫委員を命ぜられた任命書や、その尽力を賞して慰労金を下賜された際の文書が残されていた。

加えて、同年について郡が作成したであろう『宮城県牡鹿郡虎列刺病流行紀事』という資料も残されていた。本

資料は、牡鹿郡の流行状況や対策などの報告書のようなものである。そのなかで、どのような治療方法を行ったかをまとめた項目に、数十名の患者に対応した勝又医師の処置が記されていた。牡鹿郡のなかでも先頭に立ってコレラと闘った医師といえよう。

一方、「勝又家資料」には、個人宅であるだけに医療・衛生関係以外にも多様な資料が残されていた。それらによると、コレラと闘った勝又医師は、石巻町会議員や学務委員も務めていた。また、水害や火災の罹災者救助費、道路改修費、警察署新築費など、地域行政に対して数々の寄付を行っていた。こうしてみると、勝又医師が致命率の高いコレラに対して先頭に立って挑んだのは、医師としての使命感だけではなく、地域行政を担う存在であるが故の決断であったのかもしれない。

自身の研究テーマから資料を探す場合、そのテーマに直結する資料ばかりに目が行きがちである。しかし、資料保全活動は資料1点1点に目を通すため、思わぬ発見や発想を得たり、より広い視野でテーマを捉え直したり、新たな研究テーマをみつけるきっかけになることもある。東北のさまざまな歴史資料保全に取り組む本部門において、どのような「出会い」に気づけるか。アンテナを高く張って臨みたい。



1: 資料クリーニングの様子
2: 検疫委員の任命書

編集後記

コロナ禍、ウクライナ情勢、政治と宗教など、暗いニュースが多い中、東北勢初となる仙台育英の甲子園優勝は、久しぶりの明るい話題でした。一方で、本ニューズレターの編集が進む8月末日、ゴルバチョフ氏の訃報が届きました。彼のような人が今もロシアの指導者だったらと思うのは、私だけではないと思います。心からご冥福をお祈りします。(後藤章夫)



東北アジア研究センターは、文理連携・学際的なアプローチによって、シベリア・モンゴル・中国・朝鮮半島・日本における歴史・社会・自然を総合的に捉えることをその使命とする研究所型組織です。

東北大学東北アジア研究センター
ニューズレター 第94号

2022年9月29日発行

編集：東北アジア研究センター広報情報委員会
発行：東北大学東北アジア研究センター
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41
TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010

Facebook
をチェック!

